

巻頭言

慶應義塾大学商学部小野晃典研究会
第15期ゼミ長 合場將貴

私たち人間が、他の動物よりも最も優れた点として挙げられるのは、言語中枢の発達である。この言語中枢があるからこそ、人間は、後天的に獲得した知恵や技術を、言語を通じて社会的に蓄積し、共有することができた。「ペンは剣よりも強し。」このイギリス生まれの成句は、我が慶應義塾大学のシンボルにも採用されている。言葉は、単純な武力よりも優れた力を示すことがあるという意味であり、言葉というものが、古今東西変わらず力を持っていたことを表現している。今、ここにある卒業論文集は、まさに人間本来の営みを凝縮したものであると言えるのではないかと。私たち新米マーケティング学徒は、世界の最先端をひた走る学者の考えを理解し、その問題点を探究した。そして、それを解消すべく、既存仮説に対抗する仮説を提示し、それがデータによって支持されるかどうか吟味するために実証分析を行った。この一連の営みの中で、最も苦労したものの1つとして挙げられるのは、その考えを世に広く知らしめるために言葉を紡ぎ、文章として1つの形にしたことである。読者に、私たちが紡いだ言の葉を、知識として蓄積し、社会の発展の肥やしとしてもらえるように、私たちは、まず、自分の考えを明確にすること、さらには、それを最も端的にかつ分かりやすい言葉を選び出して、表現することが必要であった。その営みに、私たち慶應義塾大学商学部小野晃典研究会第15期生が、心血を注いだ集大成の数々が、この「慶應マーケティング論究」に掲載されている。

私たち第15期生は、インカレディベートを終えた3年生時の夏頃、2つのチームに分かれて、論文を執筆し始めた。いわゆる三田祭論文である。どちらの三田祭論文チームも、その道のりは平らなものではなかった。仮説がなかなか定まらなかったチームもあれば、仮説が定まろうとも、それを支える理論がなかなか組み立てられないチームもあった。4年生になり、論文執筆活動の主体は、チームから個人へと移った。卒業論文である。単著論文とはいえ、中間報告会のためには同期生との協力が欠かせない。しかしながら、卒業論文の執筆に際し、なかなか足並みが揃わず、進捗状況が悪い同期生に対して、苛立ちを見せてしまうことがあった。最終的に締め切りを守ることができず、小野先生を始め、多くの方に甚大なるご迷惑をおかけした。締切後はとりわけ、完成まで辛い日々が続いた。しかし、このように苦しいことばかりだったわけではない。マーケティング・ゼミ合同研究報告会、関東学生マーケティング大会、四分野インゼミ研究報告会、および、国際学会での発表を通して、論文を世に広く知らしめることができた際の喜びは、格別であった。また、卒業論文の執筆に際し、論文の質を高めるために、夏合宿や冬期休暇中に、仲間と論文を添削し合うにつれて、学問を探究することは楽しいことだということ、そして、卒業論文は個人のみで創るものではなく、仲間とともに力を合わせて創り上げるものであるということを実感することができた。このように、私たち第15期生が仲間とともに抱いてきた悲喜こもごも様々な感情が、この卒業論文集に詰め込まれている。私たちは、我が子のように愛する作品が、社会の発展に貢献することを願わんばかりである。

この論文集が完成に至るまでには、多くの人々の支えがあった。末筆ながら、私たちの論文執筆活動を支えてくださった方々に感謝の言葉を綴りたい。

同研究会第16期生の後輩の皆さんへ。私たちは、君たちへの指導を通じて己の無力さを痛感し、少しでも立派な先輩であろうと必死になってきた。皆さんが意欲的に三田祭論文を執筆している姿を目の当たりにしたおかげで、私たちも奮起し、こうして卒業論文集が完成までこぎつけることができた。本当にありがとう。卒業論文の執筆に際しては、皆さんの手本となることはできなかった。第16期生の皆さんは、私たちを反面教師として、どうか期日までに卒業論文を執筆してほしいと願うばかりである。

次に、同研究会第14期生の先輩の皆さんへ。第14期生の皆さんは、ゼミ活動において、立派な成果を残されており、私たち第15期生の中には、その姿に憧れて、この小野晃典研究会の門を叩いた者もいた。そんな憧れの先輩方が時に厳しく、時に優しく指導してくださったおかげで、入会時はまだ幼子であった私たちも大いに成長し、なんとかここまでやってくることができた。本当にありがとうございました。

さらに、大学院生としてご指導くださった竹内亮介さん(第9期OB)、中村世名さん(第10期OB)、石井隆太さん(第10期OB)、川村澄明さん(第13期OB)、清水亮輔さん(第13期OB)、廖舒忻さん(第13期大学院OG)、Elisabeth Sjo Engenさん(特別短期交換留学生)、および、王咏奕さん(第16期大学院)へ。大学院生の皆さんが、未熟な私たち学部生に寄り添い、丁寧にご指導してくださったおかげで、幾度となく困難を乗り越えることができました。皆さんの存在がなければ、間違いなくこの論文集は、完成しなかったであろう。本当にありがとうございました。

そして、家族へ。この2年間、ゼミ活動に没頭したあまり、多くの心配をかけてしまった。それでも、ゼミHPを通して、私たちの活動を気にかけてくれる家族の存在がいたからこそ、ゼミ活動に没頭することでき、その集大成としてこの卒業論文集を完成させることができた。本当にありがとうございました。

最後に、慶應義塾大学商学部小野晃典先生へ。一番大きな感謝の意を伝えなければならないのは、他の誰でもない小野先生である。小野先生の存在がなければ、この論文集が完成することはなかったに違いない。それは何も、卒業論文の執筆にとどまらない。私たちは、小野先生が築いてくださったこのゼミに入り、学問の魅力に取りつかれ、おのずから研究活動に邁進した。研究活動を進める中で、幾度となく困難にぶつかった。研究のテーマが定まらないときは、休日にもかかわらず、鳩森八幡神社に足を運んで、助言をくださったこともあった。ゼミの後に、小野ゼミの聖地である「つるの屋」で第15期生とともにいちごを飲みながら、助言をくださったこともあった。卒業論文の執筆に際し、私たちの文章力の至らなさ故、何度も原稿に朱筆を入れてくださった。論文という1つの作品に対する情熱を、私たちは先生の行動を通して知り、私たちは成長を遂げることができた。先生から頂いた「合格」という文字に、それがたとえ、1章分が合格しただけであっても、思わず歓喜したくなるような達成感を、誰もが抱いた。文字通り、昼夜を問わず、何度も何度も原稿を読んで頂き、誠にありがとうございました。先生のご指導があったからこそ、私たちは、この2年間、充実したゼミ活動を行うことができ、長きにわたる努力が結実し、その証としてこの卒業論文集を完成させることができた。先生の愛情あふれるご指導を糧に、社会に出て、より一層精進していく所存です。

2019年1月吉日